

## 読書通信



No. 170

① メガバンクから信金信組まで日本の金融機関の競争力は低下の一途のようだ。財務以上に金融機関としての精神の劣化が懸念される。その典型がスルガ銀行や商工中金で、実態はあきれるほどひどい。ダメな金融機関は融資残高など数字ばかりとうとうとして、寒々としたノルマもどきが社内を支配する風土が広がっている。人気の捨て銀シリーズ第3弾、橋本卓典『捨てられる銀行3 未来の金融』（講談社現代新書、928円）は金融庁から末端の支店までジャーナリストならではの綿密な取材が光っている。

数字に出ない世界こそ重要だと著者は言うが、確かに飛騨信組、鶴岡信金など共感を呼ぶ経営で成果を上げる実例は心強い。「地域金融マン必読」と帯に書かれているけれど、金融の世界だけの話ではなく多くの組織に役立つだろう。

② 市職員への暴言で辞任し出直し選挙で信任を得た明石市長が2期8年の苦闘と成果をつづっている。子どもが生き生きとしている街、子育てがしやすい街にするためにはどうするか。泉房穂『子どものまちのつくり方』（明石書店、1620円）は自画自賛に陥りかねないところだが、読後感ほむしろさわやかである。

は世間の常識は真逆である。あるいは「本のまち、明石」目指して駅前一等地のビルに図書館と大型書店を並存させ、移動図書館も巡回させるなど著者の永年の夢の実現へひた走る話もいる。わが町もこんな行政をやってほしいとつくづく思ったけれど、いや日本中の自治体が競って学んでほしいと言わなければならない。

③ 偉大な自由民権運動家の中江兆民は財政民主主義の先駆けでもあった。であれば今、兆民の主張を検証し活かすことは理にかなっていると思う。渡瀬義男『中江兆民と財政民主主義』（日本経済評論社、2268円）は兆民の言論活動と野党政治家としての膨大な業績の中から該当する言説を抽出、注解し、伊藤博文ら明治政府との対峙を描いている。厳しい言論統制の

下、立憲政治の根本に議会による財政の監督があることを丁寧な執拗に述べ続けた兆民像からは、今、兆民に改めて学ばなければならない院内、院外の惨状への警鐘が聞こえてくる。

④ スパイ天国・日本と言われて久しい。機密情報は簡単に取れるし、捕まっても文具の窃盗罪くらいしか適用できないほど微罪だ。その道の第一人者による『私を通りすぎたスパイたち』が改題して文庫化された。佐々淳行『亡国スパイ秘録』（文春文庫、756円）はゾルゲ、ラストボロフから瀬島龍三まで、戦中戦後の日本を舞台に活躍したスパイの話は年長者ほど面白いかもしれない。特定秘密保護法など立場にもよるだろうが、このくらいのスパイの世界の常識は知っておくべきなのだろう。（浅野 純次）